

第68回 埼玉県美術展覧会審査評

【第2部 洋画】

審査主任 かしわ たけし 柏 健

第68回県展は一般、会員を合わせた搬入点数が1,215点で昨年より33点少なく、入選点数は530点でした。入選率は43.6%、昨年は42.4%でしたので少し上がりました。県展は非常に入選するのが厳しい公募展だと思います。全体としてレベルの高い作品が多くありました。

搬入の時から一種の熱気を感じておりましたが、審査で作品を見て、その感を深くしました。

多様な表現の中で写真をそのまま引き伸ばして描いたような作品も散見しましたが、写真は単眼であり、絵画は人間の両眼が基盤になっているので、その基盤をつくるための訓練をすることが必要です。いわゆるデッサンの勉強です。それにはデッサンの勉強をした人に指導してもらうことです。そうすれば、膨大に費やされたエネルギーが有効に活かされるはずだとの思いを強くしました。

厳正な審査を経た入選者の中に二名の高校生が入ったことを付記します。

・埼玉県知事賞

そうかくりんりんず はんやま しゅうへい
「蒼赫林林図」 半山 修平

この作品の魅力は観る人に絵画としての強いインパクトを与える表現にあると思います。

植物の葉の集積をモチーフとしておりますが、葉の形はかなり写実的で、色は緑ではなく、赤と青と紫で周囲は白です。写実的で具体的な要素と抽象的な要素が同存化し、方向が異なる葉の動きが画面に動勢を与え歯切れの良い表現となっており、複雑にコラージュされ、その上に彩色された断片がその表現を支えております。

・埼玉県議会議長賞

れっど ほっばー
「Red Hopper」 ごみ いたる
五味 至

恐らく実際には置けない位置に配置された物たちの不思議な出会いや危うさを感じさせる力強い作品です。赤く塗られた枝、ボール、木組みなどもそれらの緊張感をより引き立てています。不自然さや不思議さの中に、しっかりと描かれる立体感や奥行など実在感が感じられます。よく見ると、作者の細かい筆致で根気強く表そうとする努力が感じられます。今後は構図の整理や、描き方の工夫でより深みのある表現を期待します。

・埼玉県教育委員会教育長賞

へんがん おだ のぼる
「片岩」 小田 昇

一億年前、秩父が海底にあった時にできた岩。その後の大きな変動を経て、今ここに静かに横たわっています。色をギリギリまで落とした厳しさの中に、作者の長瀨への強い郷土愛が感じられます。何万年もほとんど不動の岩の上で一瞬を生きる鳥をポイントに配して効果を上げています。岩の角の鋭さも適切です。

水面にゆったりとした「瀨」の流れを感じさせるとさらに良いと思います。

・埼玉県美術家協会賞

ついおく あらい ともえ
「追憶」 新井 友江

画面の右下にピンをのせた静物を描き、背面の壁面を広くとらえた構図でバランスが見事に描写された作品です。特にオレンジ色の板と白のピンが全体を引き締め、作者のセンスが感じられます。更に、たて掛けてある稲穂も効果的で女性の豊かな感情がうかがえる秀作で、手慣れた腕前の力量をこれからも続けて発揮されることを期待しています。

・埼玉県美術家協会賞

げんかいぎょう
「限界漁港-Ⅱ」 かきひさ のりゆき
蛎久 紀元

「限界漁港」とは聞き慣れない語ですが、高齢化、過疎化によって漁港本来の活気ある状態が維持できないという現状を表す題名なのでしょう。

作品は、それを声高に訴えるのではなく、漁港への静かな思いひとつにイメージを絞り切ったことで成功しています。漁港周辺の細々とした事物のリアルな描写を捨て、やや素朴ともいえる表現で、単純に、淡々と描いたことが却って効果を上げています。

・埼玉県美術家協会賞

ちょうひ たかくわ しょうさく
「寵妃」 高桑 昌作

黒と白を基調としつつ、コラージュされた布の朱、金色などが装飾的に組み込まれています。黒には墨、鉛筆、ペンなどが用いられ、白には下地の紙の白、盛り上げ材の白が用いられることにより、素材の持つ表情の違いが幅広い表現につながっています。それらを様々な技法を統合した強い画面づくりと日本人形の妖しい存在感が、和洋相まった不可思議な世界を醸成させています。

・埼玉県美術家協会賞

とろ ながしま みお
「吐露」 永島 実緒

少女が壊れた石膏像を手でつかみ何かを吐き出しています。少女の姿は暗い画面の中で、的確な描写力で手堅く描かれています。白いアリアスの像は俯瞰的に描写されています。

いったいこの少女は何をしているのでしょうか。それに対して口から吐き出した吐息はレース模様に蛍光色で描かれ、画面に大きな効果をもたらしています。

若い作者の多少奇異と感じる表現は他の出品作にも見られました。それが失敗しなかったのがこの作品の魅力でしょう。

・さいたま市長賞

「潰える'17」 ついで 橋本 はしもと 知子 ともこ

命のある能動的な植物と意志のない岩が、時に支え合い、時に戦い、やがてどちらもばらばらになり消えていきます。硬い岩をそれよりもずっと軟らかい根が割っていく様子が丁寧に描かれています。岩の色は特に美しく、そして自然です。また、構図も大胆で魅力的です。

右下の木と岩の位置関係(岩に潜り込んでいる根と岩から離れている根)を明確にするとさらに良いと思います。

・さいたま市議会議長賞

「風化」 ふうか 岡野 おかの 菊市 きくいち

長年機関車をテーマに取り組んでいる中で、今年は線路脇の野花や雑草を排して、画面いっぱいストレートに古い機関車を穏やかな色調で描き出しています。それぞれ微妙に異なる風化した古い鉄の質感を巧みに描き分けることで、長い時の流れを感じさせる佳作となっています。

車輪と胴体の中の空間の扱いが曖昧なので、もう一工夫あれば一層しっかりした画面になると思います。

・さいたま市教育委員会教育長賞

「紙風船」 かみふうせん 渡邊 わたなべ 素子 もとこ

発想・構成・描写力の三拍子そろった、優れた作品です。

紙風船という、感傷に流れがちな題材を、ビリビリと破くことでリアリティを獲得するという発想。そして、ギリギリに抑えた色彩を、明暗の豊かな階調で引き立てる巧みな構成と、それを支える堅実な描写力。明暗は絵画の骨格であるということ、改めて感じさせてくれる作品です。

・NHK さいたま放送局賞

「室内静物」^{しつないせいぶつ} 城^{じょう} 眞知子^{まちこ}

冬枯れの植物が丁寧に描かれ、全体を覆う柔らかな色調に作者の人柄が想像されます。

烏瓜^{からすうり}に焦点がいくような背景の色の工夫、ガラステーブルの暗色にのる蔦^{つた}や、ハンカチの上の木の実の配置など、よく計算された構図になりました。繊細な描写に好感が持てます。

画面の中心になる烏瓜の実を更に描き込むことで、見る者をひきつける作品に仕上がると思います。

・共同通信社賞

「水紋」^{すいもん} 石井^{いしい} 百合子^{ゆりこ}

カワセミが飛び立つ一瞬の時を捉えて、まわりの木々を映す水面の波紋をきめ細やかに丹念に描きおこした作品です。抑制された品の良い緑の扱いが効果的で美しく、詩情豊かな趣きを強めています。水面の上の木々と投影された緑の分量に対して白い水面とのバランスが巧みで、自然から切り取られた形を造形的に構築して、静かな中にも力強い作品となっています。

・埼玉新聞社賞

「陽だまり」^ひ 山田^{やまだ} 泰樹^{たいき}

画面に対して対角線状に置かれた木馬、鏡、ランプ、植物、リボンなどのモチーフが画面いっぱい置かれ巧みに構成されています。作者の画面構成力の高さに感心しました。人形等の表現に多少未熟さを感じ、画面の汚れも多少気になりますが、それにも増してしっかりした表現が素晴らしく、素直な見方が魅力的です。作者のこれからの発展に期待します。

・産経新聞賞

「新緑の頃」
しんりょく ころ
ふじさき まさひろ
藤崎 雅碩

作者は恐らく現場でキャンバスを立てて、新緑の季節のすがすがしさや眩い光、色を肌で感じながら、一筆一筆しっかりと制作していったに違いありません。見る者にその臨場感がひしひしと伝わってきます。また、対象をしっかりと捉え、それを確かめるように絵具を塗り重ねていくことにより、深みのある重厚な作品となっています。また、影の表現も、緑から青、紫への階調をうまく捉え、新緑の美しさをしっかりと描いています。

・テレビ埼玉賞

「雪が止んで」
ゆき や
さいとう かずお
斎藤 一男

雪が止んだばかりの静寂さや冷たい空気感が見る者に伝わってきます。また、近景の轍わだちのようなものから続く黒い橋、薄暗い木立、遠景へと徐々に霞んで、グレーの空へ透け込む風景が緻密に描かれています。筆跡は見られず恐らくナイフで絵具を塗り重ねて描いていると思われます。巧みな表現で、形をきっちりと表しています。今後は捉え方の変化や表現の方法を工夫し、作品により深みが増してくることを期待します。

・毎日新聞社賞

「郷愁」
きょうしゅう
たかはし たかし
高橋 孝

連立する秋の雑木林を達者な水彩のタッチで素敵に表現しています。特にモミジと思われる朱色や黄色の葉などを“面”で捉えた筆致は見事です。全体的に樹木が多いように思われますが、メリハリが良く上手に処理されている秀作です。画面右下の細い道が画面構成上効果的であり、今後も更に期待しています。

・埼玉県美術家協会会長賞

ひかり たね なかじま しんいち
「光の種」 中島 伸一

具体的な物を使い、それらを時には抽象的な形に変形させ、ある物には軽く量感を持たせたり、画面に凹凸を取り入れたりしています。背景は白の面積を多くして、画面全体の様相には多分に平面性を感じさせる画面構成となっています。特に、白い背景に用いられている無機的な線が画面の中で有効に働いている清楚な感じのする品格のある作品です。

・高田誠記念賞

おも で やまもと ともゆき
「やさしい思ひ出」 山本 智之

作品の全体としての印象は夕焼けの懐かしい情景です。画面は非常に丁寧に作られていますが、特に電車の塗料の部分の錆びたところはそれを感じさせられます。

女の子の顔が半分、地平線近くから斜になり、のぞいている眼もこの雰囲気醸し出す効果を担っていて、月も少し見え作者のデリケートな感覚が感じられる秀作です。